



COVID-19 に関する報告書

医療法人 回生会
宝塚病院

1

Index

- ◆ 新型コロナワクチン接種後の副反応
- ◆ 接種後副反応に対する服用薬
- ◆ 新型コロナウイルスの影響による救急体制の変化

2

新型コロナワクチン接種後の 副反応

新型コロナワクチン接種後の副反応①

当院スタッフにおける
新型コロナワクチン接種後の副反応について
(ファイザー社製)

	1回目 171名	出現頻度 %	2回目 170名	出現頻度 %
副反応あり	7	4.10%	38	22.40%
37.5℃以上の発熱	0	0%	29	17.10%
倦怠感	4	2.30%	9	5.30%
頭痛	3	1.80%	8	4.70%
筋肉痛	1	0.60%	8	4.70%
関節痛	0	0%	8	4.70%
悪寒	0	0%	11	6.50%
発疹	3	1.80%	5	2.90%
悪心・嘔吐	0	0%	6	3.50%

	人数	発熱		倦怠感		頭痛		筋肉痛		関節痛		悪寒		発疹		悪心・嘔吐	
		初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目	初回	2回目
年代別			29名	4名	9名	3名	8名	1名	8名		8名		11名	3名	5名		6名
20-39歳	102名	0	23	3	8	2	8	1	8	0	8	0	10	2	4	0	5
40-70歳	68名	0	6	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1

新型コロナウイルスワクチン接種後の副反応②

- 急性副反応

接種後15分以上の観察中に、アナフィラキシー反応(じんましん・腹痛や嘔吐など消化器症状、息苦しさ)や血管迷走神経反射(強い痛みによる緊張をきっかけにして生じる立ちくらみ、血圧低下、失神)などの急性副反応を呈した例はなかった。

- 全身症状を呈した副反応

全身症状を呈した副反応は、2回目接種の翌日に出現する頻度が高かった。

接種後の全身反応の頻度は、2回目接種後、40-70歳の中～高齢者に比して、20-39歳の若年者で、明らかに高かった。

2回目の接種後の副反応のうち、最も頻度の高かった症状は37.5℃以上の発熱であった。

新型コロナウイルスワクチン接種後の 副反応に対する服用薬

新型コロナワクチン接種後の服用薬

- ワクチン接種後の鎮痛解熱剤の効果

初回接種時に注射部位の疼痛、頭痛、発熱を認めた7名のうち、アセトアミノフェン錠を内服した例は1名のみであった。

2回目接種後、アセトアミノフェン300mg錠を内服した25名のうち、アセトアミノフェン錠が有効であった例は6名。

十分な効果が得られなかった19名のうち、市販の鎮痛解熱剤内服を追加した7名、常用しているロキソプロフェン錠60mgを内服した6名、アセトアミノフェン錠1回600mgを服用した1名では、すみやかに解熱した。

また、鎮痛解熱剤を追加せず、経過観察を行った例は5名であった。

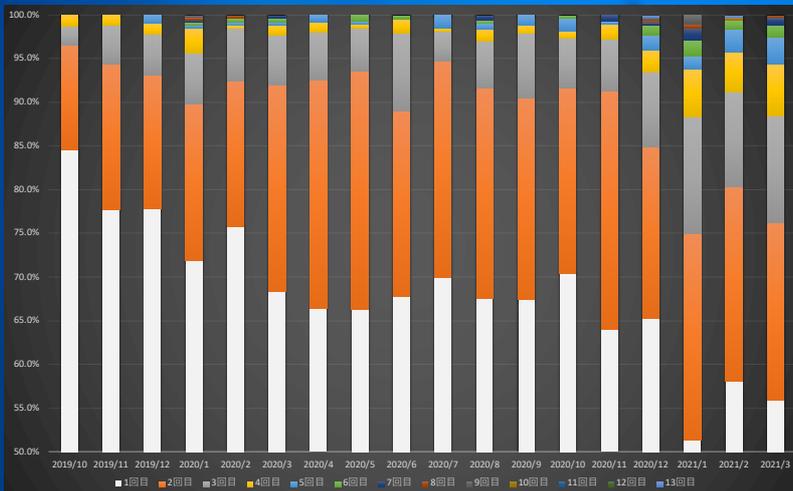
消炎鎮痛剤の内服の有無に関わらず、翌日には解熱し、全身状態の悪化はなかった。

日本感染症学会のCOVID-19ワクチンに関する提言(第2版)では、接種後の発熱や疼痛に対してアセトアミノフェンや非ステロイド性解熱鎮痛薬(NSAIDs)を使用することは可能と報告している。しかし、解熱鎮痛薬をあらかじめ投与することでワクチンの投与が免疫原性に影響を与える可能性があるため、発熱・疼痛の出現する前の予防的に解熱鎮痛薬を内服しておくことは望ましくないと報告されている。

新型コロナウイルスの影響による 救急体制の変化

新型コロナウイルスの影響による救急体制の変化

【当院救急搬送患者における要請回数の割合】



- ◆ コロナウィルスの発生頻度が増加するに従い、収容に収めきれない病院数が増加している。
- ◆ 第三波の発生である2020年11月以降はその数が著明に増加している。



- ・ 救急車のスムーズに決まらない
- ・ 希望するかかりつけ病院や、近隣病院での治療ができない。

まとめ

① 当院における新型コロナワクチン接種後の副反応

- ・ 急性副反応は、当院では検出されなかった。
- ・ 全身副反応は、2回目、若年層に明らかに高かった。
- ・ 副反応に対しての服用薬は効果があり、翌日には解熱し、全身状態の悪化はなかった。

② 救急体制は逼迫しており、救急車を要請してもかかりつけ病院や近隣の病院への入院が難しい状態である。